

スキー実習におけるグループ・ローテーション指導の効果について(2)

— 中級グループでの試み —

中西 匠, 二宮 恒夫, 行森 光, 會田 宏, 野老 稔

(武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻)

The effect of the Group Rotation Teaching in Ski Intensive Course(2)

— The Case of the Medium Grade Class —

Takumi Nakanishi, Tsuneo Ninomiya, Hikaru Yukimori,
Hiroshi Aida, Minoru Tokoro

Physical Education Major,

Department of Education, School of Letters,

Mukogawa Women's University, Nisihomiya 663-8558, Japan

The purpose of this study was to make clear the effect of the Group Rotation Teaching in the medium grade class of Ski Intensive Course. Results are summarized as follows:

- 1) Through the Group Rotation Teaching, students have received more various helpful advice than the beginner's class. Students are content with the Group Rotation Teaching, because they meet many teaching methods and teachers in this class. But their skill of skiing isn't superior to the beginner.
- 2) For teachers, the Group Rotation Teaching is valuable to exchange their views and information about teaching skiing. Through the meeting about Group Rotation Teaching, They talk about not only teaching skiing, but about themselves.

I. はじめに

これまでの一連の研究¹²を通じて、スキー実習における初級者を対象としたグループ・ローテーション指導(複数の指導者がグループを組んで複数のクラスをローテーションしながら指導をおこなう指導形態。以下GR指導)³の効果として、以下の5点が認められた。すなわち、①GR指導は、学習者に技能習熟についての多様なことばかけ情報を、全講習を通じて提供し続けることに結びつく。②GR指導は、技能習熟の面では従来の方法と同様の効果を期待できる。③指導者はGR指導を肯定的に評価している。特に指導者どうしのコミュニケーションが促進されることに意義を見出している。④学習者は、指導方法や表現のバリエーションの豊富さ、新鮮感、指導者とのコミュニケーションの広がりなど、GR指導を肯定的に評価している。⑤GR指導は、初級者でも比較的レベルの高い受講者に対しておこなうほうが効果的である。以上5点である。GR指導は、初級者にとっては、おおむね効果的な指導方法であるということが明らかになった。

しかしながら、この研究成果は一つの事例の域を出ず、GR指導は、いつでも誰でもがおこなえるような確立した指導方法というレベルにまで一般化されたものではない。GR指導が指導方法として確立するためには、より多様な条件の中でこの指導の特徴や限界を明らかにする必要がある。昨年度の研究の結果、今年度の実験的実践にむけて以下の仮説が設定された。

仮説 1: 技能レベルが高い学習者を対象にしたほうが、GR 指導はより効果的に展開することができる

初級者を対象とした GR 指導においては、初級者の中でも技能レベルが低い群(ブルークボーゲンそのものの完成度が低い。以下下位群)よりも技能レベルの高い群(パラレルターンの完成を見通せる。以下上位群)の方が、4人の指導者の多様な表現のアドバイスを受け、効果的に学習することができるということが明らかとなった。上位群は、パラレルターンの習熟に向けた多様なアドバイスを具体的な自分の課題として認識できるのに対し、下位群では、習得しようとする課題じたいが非常に困難であるため、指導者の言っていることが実感として理解できなかつたり、多くのことばかけ(情報)がかえって混乱要因になったためであると考えられる。

したがって初級者よりもレベルの高い中級者を対象に GR 指導をおこなえば、技能習熟・指導者とのコミュニケーション・学生の満足度などの諸側面において GR 指導をより有効に展開できると考えられる。

仮説 2: 年齢(指導歴)に差のある指導者たちがグループを組んで GR 指導をしても、年齢が近い指導者どうしがおこなった場合と同様の成果が得られる。

昨年度の実験的実践で GR 指導を実際におこなった指導者は、35歳(指導歴5年)、42歳(指導歴20年)、45歳(指導歴16年)、52歳(指導歴12年)と、年齢構成、指導歴ともに比較的似かよったメンバーによって構成されていた。年齢が比較的似かよっているため、日ごろからコミュニケーションもとりやすく、講習ごとにおこなわれる申し送りミーティングもはじめから打ち解けた雰囲気で行うことができた。指導者どうしの綿密なコミュニケーションは、GR 指導の前提条件である。その意味において、昨年度の実践は GR 指導が効果的に展開されやすい指導者構成であったといえる。

GR 指導が指導方法として有効であるとするならば、年齢や指導歴に幅があり、しかも日常的なコミュニケーションが必ずしも十分でないメンバーでおこなっても、同様の成果が得られると考えられる。

本研究の目的は、2つの仮説を検証することを通じて、GR 指導を指導方法としてより一般化するための課題、問題点を明らかにすることである。

Ⅱ. 1997 年度グループ・ローテーション指導の概要

1. スキー実習の概要⁴

対 象: 武庫川女子大学体育科学生 160名(大学2年69名, 短期大学1年生90名, 短期大学2年生1名)

期 間: 1998年2月22日(日)~28日(土)

実習場所: 長野県 志賀高原高天が原スキー場

2. 学習者と指導者の構成

学習者は、実習が始まる前の自己申告により、技能レベル別に以下の4つのグループに分けられた。すなわち上級(パラレルターンができるレベル, 1~3班26名), 中級(初歩のパラレルターンができるレベル4~7班37名), 初級(ブルークボーゲンができるレベル8~16班75名)全くスキーを滑ったことがない初心者(17~20班35名)の4グループである。

今回の実習では、仮説1を検証するため、初歩のパラレルターンができる中級レベルの学習者37名を対象に GR 指導が実施された。中級グループの学習者はさらに、実習初日の班編成テストにより、技能レベル別に4つの班[4班(10名), 5班(10名), 6班(9名), 7班(8名)]に分けられた。

指導者は表1.に示すような属性を持つ5名が配属された。仮説2を検証するため、指導者配属の際には、年齢構成にばらつきが出るよう配慮された。特に今回は、50歳代後半から60歳の指導者3名と、30歳代半ばの指導者2名で構成されており、約20年の世代間ギャップがあるのが特徴である。

表 1. 1997 年度 GR 指導の指導者とその属性

名前(記号)	性別	年齢	指導歴
A	男	62	25
B	男	57	33
C	男	64	33
D	男	36	6
E	男	33	5

3. プログラムと GR 指導の具体的な方法

1) 目標

スキー実習全体を通じての中級グループの目標として、技能面では、①整地された中程度の斜面で、パラレルターンで大回り、小回りができる。②初歩のステッピングターンができる。認識面では、③スキーをおこなう際の身体操作の原則と基本的な操作方法が理解できる。④班のメンバーを対象に適切なアドバイスができる。さらに情意面では⑤実習そのものを楽しむという5点が目標として設定された。

2) GR 指導の手順と指導員の配置

表 2. は、今年度のスキー実習の日程と GR 指導の手順、指導員の配置を示したものである。移動日を除くと実習をおこなったのは5日間、午前午後合わせて10コマである。実習初日(23日)の午前は班分けテストを、4日目(26日)の午後は評価のためのテストを指導者全員が担当しておこなった。また、最終日(27日)は一日かけて志賀高原の他のゲレンデを利用したツアー(班単位で行動)が行われた。ゲレンデでの講習は、23日午後から26日午前の合計6コマ行われた。

表 2. GR 指導の手順と指導員の配置

班		4班	5班	6班	7班	フリー
責任者		A	B	C	D	E
23	A.M.	班分け(全員で担当)				
	P.M.	A	B	C	D	E
24	A.M.	D	A	E	C	B
	P.M.	C	D	B	E	A
25	A.M.	E	C	A	B	D
	P.M.	B	E	D	A	C
26	A.M.	A	B	C	D	E
	P.M.	テスト(全員で担当)				
27	A.M.	終日ツアー(班単位で自由行動)				
	P.M.					

※ 表中 A・B・C・D・E は、それぞれ指導者を表す

4班を例にローテーションの手順をみると、23日午後の初めの講習と26日午前の最後の講習は、4班のベースとなる指導者(責任者)のAが担当した。24日・25日の4回の講習は、D⇒C⇒E⇒Bの順で、それぞれの指導者がローテーションして担当した。表中「フリー」の指導者は、その時間は特定の班を担当せず、全体を掌握したり、特別な働きかけが必要な学習者に対応したり、次に自分が担当する班の講習を参観するなど、自由に行動した。

3) 指導内容

昨年度の GR 指導では、事前に①ブルークボーゲン→シュテムターン→パラレルターンという流れ、②徐々に滑走距離・時間を長くする、③徐々に斜面を難しくするの3点のみを確認し、各講習ごとのゲレン

デでの具体的な指導内容は各指導者の裁量に任せられた。このような大まかな計画は、各指導者の個性的な指導を引き出すことができる反面、指導の連続性が遮断されたり、そのことによる学習者の混乱を招きやすい。

今年度は、昨年度指導者を対象に実施された講習会の講習内容をもとに作成された「スキー実習指導者マニュアル」を用い、マニュアルに示された講習内容、順序を軸に各指導者が個性的な指導を展開し、指導の連続性を確保することとした。なお、②徐々に滑走距離・時間を長くする、③徐々に斜面を難しくするという2点は、昨年同様全講習の大まかな基本方針として事前に確認された。

4) 講習内容、留意事項の申し送り

昨年度のGR指導では、指導の連続性を確保するため、講習終了ごとに申し送りミーティングをおこなった。このミーティングでは、講習内容、使用したゲレンデとその状態、班全体の到達度、気になる学習者とその状態などの情報や意見交換などが行われた。

今年度は、申し送りミーティングをより効率的に進めるため、ミーティングを録音し、本部スタッフが次のミーティングまでに使用ゲレンデ、練習内容、特記事項をまとめた「グループローテーション指導メモ」を班ごとに作成した。

各指導者は、自分が次に担当する班の、それまでの講習で使用したゲレンデ、講習内容、到達度(とくに困難な学習者とその様子)をすべて一覧でき、その上で次の講習の使用ゲレンデ、講習内容を決定して講習を行った。

Ⅲ. グループ・ローテーション指導の効果

以上のように、今年度のGR指導は、昨年度の実践をベースにいくつかの新しい試みを加えて実施された。以下では、①学習者にとってのことばかけ情報(アドバイス)の多様性、②学習者によるGR指導の評価、③技能の習熟、④指導者によるGR指導の評価、の4点からGR指導の効果について検討する。

1. 技能習熟にかかわることばかけ(情報)の多様性

昨年度の実験的実践の結果、初級者指導に関しては、GR指導は学習者に有効なことばかけ(アドバイス)を最後まで与えつづけることができるということが明らかになった。それぞれの指導者によって着眼点や強調点、あるいは表現が異なるので、学習者にとっては、指導者がローテーションすることにより多様な情報を得ることができるためと考えられる。

中級者を対象にした本年度も、毎講習直後に『さっきの講習中にピン!ときたアドバイスがありましたか。あった人はそのアドバイスをいった人と具体的なせりふをかいください(おもいつくだけ)。』という課題を与え、単純なことばかけの量だけではなく学習者にとって直接の手がかりとなった(ピンときた)アドバイスを再現させた。

ピンときたアドバイスの1講習一人あたりの平均個数は、2.58個であった。初級者を対象とした昨年度の平均個数1.69個よりも0.89個多い。

図1.は、各講習ごとのピンときたアドバイスの出現数を、初級者の場合と比較したものである。グラフ横軸の(講習回数)は、23日午後から26日午前にいたる合計6回の講習を示す。

各講習ともに中級者の方が上回っている。最後の講習(27日午前)を除くと、各講習とも一人当たり約1個多くのアドバイスを受けている。昨年度の初級者と今年度の中級者とは指導者群および学習者群が違うので単純な比較は不可能であるが、講習の全過程を通じて、初級者よりも中級者のほうが多くのアドバイスを受けることができている。

図2.は、技能レベルによるアドバイスの受容の推移をさらに細かく見るため、中級の4班を中級上位2班と中級下位2班に、初級4班を初級上位2班と初級下位2班に分類し、各講習ごとのアドバイスの個数の経過を示したものである。各群のアドバイスの平均個数を比較すると、中級上位2.43個、中級下位

2.74 個, 初級上位 2.13 個, 初級下位 1.23 個である。初級下位が目だって少ないのを除いては, 他の 3 群には大きな差はない。講習ごとの経過は, 中級下位群が漸減傾向にある以外は, ほぼ横ばいの経過を示した。

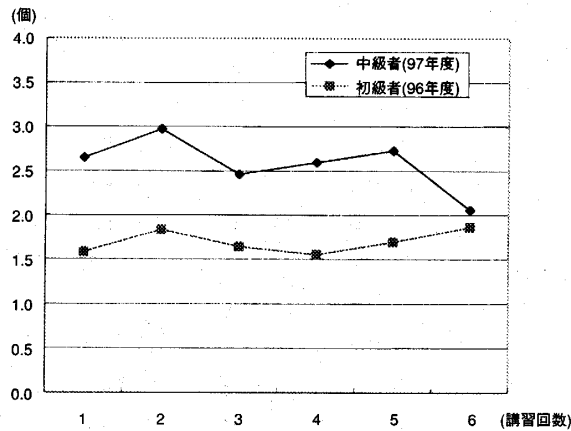


図 1. 講習ごとのピンときたアドバイスの個数(2群) 比較

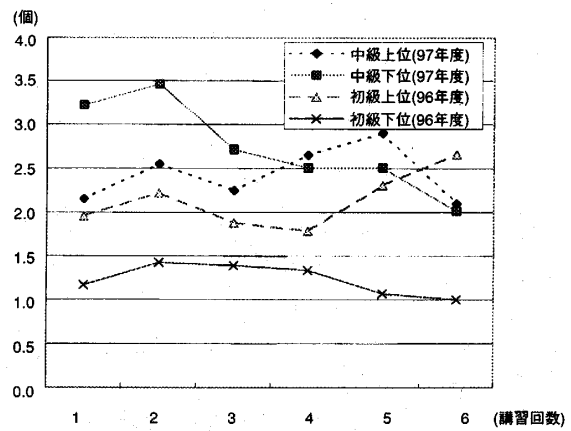


図 2. 講習ごとのピンときたアドバイスの個数(4群) 比較

以上の結果から, 多様なアドバイスを受け続けるという意味では, 初級者よりも中級者に GR 指導をおこなったほうが効果的であるということがわかった。しかし, 4 群比較からわかるように, 技能レベルが高ければ高いほど効果的であるというわけではない。初級上位, すなわち 6 回の講習でパラレルターンの完成を見とおせる程度の技能レベルであれば, GR 指導による各指導者からの個性的な指導内容を取捨選択し, 自分の技能習熟に結びつけることができるということが明らかになった。

2. 学習者によるグループ・ローテーション指導の評価

学習者による GR 指導の評価を見るため, 実習終了直後に学習者全員に GR 指導を受けてみての感想を自由記述で求めた。

表 3. は, 感想文に記されている GR 指導に対する評価を, 記述内容から分類したものである。なお, ひとつの感想文の中に二つ以上の観点からの記述がある場合もそれぞれ別々に集計した。表中左欄は中級者(97年度)の学習者, 右欄は初級者(96年度)の学習者の集計結果を表す。

肯定的な評価が延べ 50 個に対し, 否定的な評価は延べ 20 個であった。具体的な記述内容を数量的にみれば, GR 指導は学習者に肯定的に捉えられていることがわかる。

初級者との比較で中級者の特徴を見ると, 指導方法のバリエーション(40.5%)や自分にあった指導方法(29.7%)など, 技能習熟に直接かかわる部分での評価が高い。また, 相性の悪い指導者が続かない(13.5%), 多くの指導者とコミュニケーションがとれる(5.4%)など, 指導者とのかかわりに関する部分では初級者と比べて評価が低い。否定的な記述内容についても, 中級者は同じ内容の繰り返し(13.5%)など, 技能習熟にかかわる点を指摘している。初級者で多かったいろいろなことをいわれて混乱する(初級者 25.7%)は 8.1% と少なかった。

また, 文章全体の結論として GR 指導に対して否定的な評価を下したものは 1 名(2.7%)であり, 30 名(84.0%)のものは何らかの理由で GR 指導を肯定的に評価していた。なお, 残りの 6 名(16.2%)は, 感想文の趣旨が肯定的ないしは否定的な結論を下すというものではなかった。

以上のことから, 中級者においても学習者は GR 指導を肯定的に評価しており, 初級者と比べて技能習熟にかかわるバリエーションの豊富さ, 自分にあった指導方法, 新鮮感などをより評価しているということがわかった。中級者は多様な表現で個性的に行われる 5 人の指導者の指導, 助言を自分の課題に照らし合わせて取捨選択できるため, 混乱することなく自分の学習に効率よく生かすことができたためと考えら

れる。

表3. 学習者による GR 指導の評価

(縦%)		中級者 97 年度 (n=37)		初級者 96 年度 (n=35)	
肯定的 評価	指導方法のバリエーションが豊富	15	40.5%	12	34.3%
	自分にあった指導を選択できる	11	29.7%	2	5.7%
	新鮮である・マンネリ化しない	9	24.3%	10	28.6%
	いろんな表現でわかりやすい	6	16.2%	8	22.9%
	相性の悪い指導者が続かない	5	13.5%	10	28.6%
	多くの指導者とコミュニケーションがとれる	2	5.4%	7	20.0%
	何度も繰り返し学習できる	2	5.4%	0	0.0%
否定的 評価	同じ内容の繰り返し	5	13.5%	1	2.9%
	いろんなことを言われ混乱する	3	8.1%	9	25.7%
	指導に順序性がない	3	8.1%	0	0.0%
	指導者によって指導内容が矛盾する	3	8.1%	0	0.0%
	中途半端になる	2	5.4%	1	2.9%
	個人指導の機会が少ない	2	5.4%	0	0.0%
	指導者が学習者を把握していない	1	2.7%	2	5.7%
コミュニケーションが深まらない	1	2.7%	0	0.0%	

3. 技能の習熟度

技能習熟の程度を見るため、実習最終日の午後に評価テストを行った。テスト項目および評価基準はクラスごとに独自のものが使用された。中級クラスでは、パラレルターン(大回り、小回り)、初歩のステップピングターン、総合滑降の4種目の総点によって評価された。学習者全員が合格点に到達し、技能習熟については当初の目標を達成したといえる。

本学独自の評価テストと同時に、希望者を対象とした S. I. A. による国際テストが行われた。ここでは、中級グループとともに上級グループ、初級グループからも多くの学習者が受験したシルバーメダルの検定結果をもとに、他のグループとの比較で GR 指導を受けた中級グループの技能習熟のレベルを検討する。表4. は、各グループごとの受験者数、3種目の平均得点を表したものである。なお、検定はシュテムターン、パラレルターン、ウェーデルンの3種目で行われた。

表4. インターナショナルテスト(シルバーメダル)の結果

グループ	受験者数	平均得点	標準偏差
上級	9	73.19	1.97
中級	24	68.97	1.72
初級 (上位2班)	16	72.29	1.77

この検定は希望者のみに実施されたので、厳密なグループ間の比較は不可能である。また、本学のスキー実習は S. I. A. の検定を目標に実施されているわけではないので、指導の観点と評価の観点に若干のずれがあったと考えられる。しかし、平均得点を比較すると GR 指導を受講した中級グループのポイントは、他の2グループより低いということがわかる。

GR 指導は、当初の目標を達成するという意味では学習者の技能を高めることができたが、中級レベルにおいては、現状のままでは従来の指導方法よりも効率よく技能を向上させることができるとはいえないということが明らかになった。

3. 指導者によるグループ・ローテーション指導の評価

指導者による GR 指導の評価を明らかにするため、昨年度同様、実習終了直後に各指導者に、以下に示すような 5 項目について自由記述で振り返ってもらった。以下、指導者の回答(全文)を紹介し、指導者の実感から GR 指導の効果について検討する。

①学生とのコミュニケーションについて

- 半日の指導では、学生の顔と名前が覚えられない。特に実習中ゴーグルをかけていたら素顔がわからないため、ホテル内でも一般の学生とおなじになってしまい、班の学生としてのコミュニケーションは特に取れなかった。(男性, 62 歳, スキー指導歴 25 年)
- 通しの指導に比べ、全く希薄となる。教育の成立条件のひとつをなす信頼関係の確立がなされないことから、技術伝達講習会ではあっても教育・実習とはいいい難いものとなっている。(男性, 57 歳, スキー指導歴 33 年)
- 半日という短い時間なので深い交流ができないのが残念であった。(男性, 64 歳, スキー指導歴 33 年)
- 確かに話をする人数が増えるという意味ではコミュニケーションは広まったといえるが、深まりは期待できない。ただし、自分の班の学生については 2 回の講習プラス最終日のツアーがあるので結構よくしゃべれた。(男性, 36 歳, スキー指導歴 6 年)
- 一人で 5 日間教える方法と比較するとより多くの学生と浅くコミュニケーションがとれたと感じた。一人一人に対する深い指導ができないため、学生と指導者の距離は多少あるように感じた。(男性, 33 歳, スキー指導歴 5 年)

話す人数が増えるという意味でのコミュニケーションの広がりはあるものの、それぞれの学習者とコミュニケーションを深めることができないという点で一致している。指導者から見て GR 指導は、学習者とのコミュニケーションを深めることができる指導法であるとはいえない。

②教師間のコミュニケーションについて

- 班としてのミーティングで引き継ぐ程度であったと思う。風呂や食事の時に班の全体の話題があった。(男性, 62 歳, スキー指導歴 25 年)
- 唯一、効果のある点と認められる。担当者相互の申し送り、確認など、半日ごとのミーティングは自他ともに効果的である。(男性, 57 歳, スキー指導歴 33 年)
- 教師間は良くとれていた(男性, 64 歳, スキー指導歴 33 年)
- ミーティングも思った以上にスムーズにいき、教師間のコミュニケーションは従来の方法と比べものにならないほどよくとれた。情報の交換はもちろんそれ以外にも話題は多岐にわたり、最後のほうでは、ミーティングそのものの雰囲気もかなり打ち解けたものとなった。(男性, 36 歳, スキー指導歴 6 年)
- 大変よかった。スキー指導に関する申し送りでミーティングをもったが、スキー指導以外のところでもお互いをより深く理解できたのではないかと感じた。(男性, 33 歳, スキー指導歴 5 年)

すべての指導者が、この点でのメリットを認めている。共通の対象(指導内容・学習者)にむけて、教師間のコミュニケーションは深まったといえる。特に 30 歳代の指導者は、具体的な指導に関する情報の交流とともに、スキー指導のみならず指導者どうしの人間的交流にその価値を見出している。

③ 5 日間のゲレンデでの講習の進め方について(負担感など)

- 計画の中で進歩の遅いものなどについて引き継ぎを十分にする。(男性, 62 歳, スキー指導歴 25 年)
- 特に負担感はなし。ただ、テストの結果には愕然とした。細切れ担当のマイナス面が集約された結果と思う。技術伝達講習的性格の形式なのにその技術点が最悪となった。よほどよく検討して(メリット, デメリットを)実施しないと大きな問題が残る。(男性, 57 歳, スキー指導歴 33 年)

- ・非常に良かった。(男性, 64歳, スキー指導歴33年)
- ・従来の方法と比べてとくに負担感がふえる, ということはない。いずれにしても講習内容のバリエーションはたくさん用意する必要があるが, 表現方法に関しては自分の表現方法は基本的に1パターンでよく, その意味では楽。(男性, 36歳, スキー指導歴6年)
- ・一人で5日間教える方法と比べると負担感は少ない。特に今回の自分の場合, 班を持たずに指導に参加したため班指導に対する責任が軽かった分負担感は少なく感じた。「負担感の軽さ」=「責任感の軽さ」につながらないようにしなければならないと思ったりもする。(男性, 33歳, スキー指導歴5年)

負担感に関しては, 軽減したという意見が多い。ただし, 細切れ担当の問題点や, 負担感の軽さが責任感の軽さに結びつきかねないなど, 講習の進め方全般については検討の余地が多くあることを指摘している。

④学生のスキーの技術を上達させることはできたか

- ・担当した半日はそれぞれ上達させるだけの指導はできたと思う。(男性, 62歳, スキー指導歴25年)
- ・技術上達に関しては不適切であると思う。指導者の得手, 不得手により担当内容を勘案するとかすれば改善といえるが, 指導者がある技術内容を半日担当するのみでは過不足が生じ, 特にもうちょっとやれば完成かといったものに対して融通がきかない。特にその半日の教程に遅れたものに対しては悲劇的であった。(男性, 57歳, スキー指導歴33年)
- ・短い時間の割には懸命な指導活動ができたし, 学生も良く注意力を働かせた。(男性, 64歳, スキー指導歴33年)
- ・だいたい上達させることはできた。ただし, ローテーションしたからことさらうまくさせられたという感じもしない。(男性, 36歳, スキー指導歴6年)
- ・班によって異なるがおおむね上達させることができたと感じている。例えば, 4・5班はほぼ同じテーマ(外向とリズムを重視したパラレルとリズムを重視したウェーデルン)を実習したが, 4班は上達が目に見えて感じられたが, 5班はそれほどの実感はなかった。このように班によって『主観的上達させられた度』は異なった。(男性, 33歳, スキー指導歴5年)

自分の担当時間内については上達させられたという達成感が述べられているが, 担当者の指導内容による配置がえの必要性や, 細切れによる融通のなさなど, 全体としての技能習熟の保障という意味では, 多く課題, 問題点が指摘されている。

⑤5日間を通じてフレッシュ感が続いたか, マンネリ感があったか

- ・フレッシュ感は毎日あったが, 固定した班だと学生の上達に責任を強く意識するが, 残念ながら義務的になったのではないかと反省している。(男性, 62歳, スキー指導歴25年)
- ・いずれもなし。マンネリ感については相手が変わり, 指導内容が変わるのでなし。フレッシュ感については相手は新しくなるが教育指導上でいうフレッシュ感といったものではない。学生の弱点, クセ, 欠点, 優れた点等などのみこみに忙殺される。指導という観点からすると「無責任」になったといえる。(男性, 57歳, スキー指導歴33年)
- ・大変なフレッシュ感の連続であった。(男性, 64歳, スキー指導歴33年)
- ・マンネリ感は, まるでなかった。講習ごとに学生が替わるので, 一種の緊張感「フレッシュ感?」が続いた。(男性, 36歳, スキー指導歴6年)
- ・1回1回異なる班を上達させるべく講習に臨んだため, 毎回フレッシュ感が続いた。マンネリ感とはほとんどなかった。次にどんな学生がいるのかと楽しみにしていた。(男性, 33歳, スキー指導歴5年)

マンネリ感はないが, フレッシュ感については, 50-60歳代の指導者が「義務的」「無責任」と否定的にとらえているのに対し, 30歳代の指導者は「緊張感」「楽しみ」と肯定的に捉えている。感じ方, 対応とも世代による違いがある。

Ⅳ.まとめ

中級者を対象としたGR指導の効果について検討してきた。はじめに提示した仮説とのかかわりで今年度のGR指導を総括し、今後の課題を明らかにしたい。

仮説1:技能レベルが高い学習者を対象にしたほうが、GR指導はより効果的に展開することができる

初級者よりも中級者のほうが、多くの指導者がかかわることによる助言や指導を、効果的に受けることができる。学習者は、このように指導者から多様な指導や助言を受けられることができるという点で、この指導法を肯定的に評価している。ただし技能習熟に関しては、あまり効果的であるとはいえない。学習者の意識は指導者との交流よりも技能習熟に向けられており、両者のコミュニケーションは広く浅くというレベルにとどまる。

中級者においては、ある程度できるパラレルターンを斜面や状況に応じて洗練化させることが技術課題になる。そのため、各学習者に「ピンとくる」情報をできるだけ豊富にあたえつつ、習熟度を確認しながらの繰り返し練習が必要である。今回のGR指導では、技能習熟にかかわる情報の提供という面では効果が確認されたものの、技能習熟に関しては更なる改善の余地があるということがわかった。

仮説2:年齢(指導歴)に差のある指導者たちがグループを組んでGR指導をしても、年齢が近い指導者どうしがおこなった場合と同様の成果が得られる。

年齢差のある指導者群においてもGR指導は負担感を感じることなく実施することができる。GR指導は、指導者どうしの情報交換やコミュニケーションの深まりには非常に効果的である。

学内のスタッフでスキー実習を実施した場合、スタッフ全員がスキーの専門家というわけではないので従来の方法では、指導方法のバリエーションにも限りがあるためマンネリ化から指導の行き詰まりを招きやすい。GR指導および申し送りミーティングにより、指導者はアイデアを交流しあい、お互いの指導のバリエーションを広げることができた。また、毎講習ごとに顔を合わせてミーティングを持つことは、日常的なコミュニケーションが必ずしも十分でない年齢差のある指導者たちのあいだにも人間的交流を生み、コミュニケーションの深化、お互いの理解に効果があるということがわかった。

今後の課題として、以下の諸点があげられる。

- 1) 細切れのマイナス面を解消するため1日単位でのGR指導を実施する。GR指導のマニュアルの整備、指導者による種目別役割分担の検討などの改善を加え、技能習熟を向上させる。
- 2) 講習全体の中でのGR指導の割合を少なくし(たとえば3回は同じ指導者)、指導の連続性と多様性、あるいはコミュニケーションの深まりと新鮮さを両立させる。
- 3) GR指導をおこなう人数を2人ないし3人程度に縮小し、指導の連続性と多様性、あるいはコミュニケーションの深まりと新鮮さを両立させる。

¹ 中西 匠・會田 宏・野老 稔・塩満勝麿, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 45, 73-82(1997)

² 野老 稔・島田博司・二宮恒夫・會田 宏・中西 匠・加村 博, 武庫川女子大学教育研究報告, 20, 11-90(1998)

³ この指導法の基本的発想及び具体的な手続きについては, 前掲2), 60-63 参照。

⁴ 本学スキー実習の概要については, 島田博司・三井正也・野老稔・徳家雅子・二宮恒夫, 武庫川女子大学教育研究所研究報告, 16, 187-246(1997)参照。

⁵ 前掲2), 14-24 にマニュアルの全文を掲載。